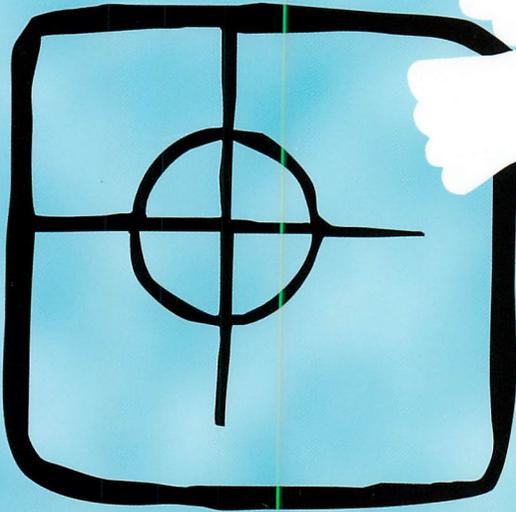




The Crisis Environments Training Initiative  
and the Disaster Management  
Training Programme of the United Nations

# 平和的手段による 紛争の転換【超越法】

Conflict Transformation  
by Peaceful Means  
【the Transcend Method】



著 ● ヨハン・ガルトウング  
*Johan Galtung*

編集 ● 伊藤武彦  
*Ito Takehiko*

訳 ● 奥本京子  
*Okumoto Kyoko*

ISBN4-89488-003-2 C0036 ¥700E



9784894880030



1920036007004

# 平和的手段による 紛争の転換【超越法】

---

国連危機環境訓練構想 (CETI)  
国連災害管理訓練プログラム (DMTP)  
マニュアル

**Part.1** 参加者プログラム/簡略版

**Part.2** トレーナー・マニュアル/簡略版

平和文化

定価(本体700円+税)

# 平和的手段による紛争の転換

## —— 超越法 ——

国連危機環境訓練構想(CETI)  
国連災害管理訓練プログラム(DMTP)  
マニュアル  
Part I : 参加者マニュアル  
簡略版  
Part II : トレーナー・マニュアル  
簡略版

ヨハン・ガルトゥング著  
dr hc mult 平和学教授  
トランセンド(TRANSCEND) : 平和と発展のネットワーク代表

1996年12月 アルファス・デルピ  
1997年5月 ジュネーブ  
1997年11月 京都

伊藤武彦編集  
奥本京子 訳

© 國際連合 1998年

Utilization and duplication of this training module and its contents is permissible; however, source attribution to the U N Crisis Environments Training Initiative (CETI) and the Disaster Management Training Programme (DMTP) is required.

## 目次

アプローチの要旨 .....	7
序説 紛争の理論と実践——ある展望 .....	11
紛争の結果と紛争の過程 .....	25
訓練者のためのポイント .....	30
フロー・チャート .....	32
一目で見る超越法【2ページ版】 .....	34
一目で見る超越法と一つの例 .....	36
「紛争の理論と実践——ある展望」に関するコメント .....	39
創造性、超越、そして紛争の転換 .....	43
二つの話：らくだ、数、その他のことについて .....	53
<b>【付録】 紛争の転換</b>	
——トレーニング・コースのための練習問題 .....	56
編集者解説 59	
訳者あとがき 63	

## 参加者マニュアル【完全版】の構成

### 紛争ワーカー

- 1 紛争ワーカー：これから未来への職業
- 2 紛争ワーカー：個人のプロフィール（自己への関係）
- 3 紛争ワーカー：社会的プロフィール（社会への関係）
- 4 紛争ワーカー：他者への関係性、紛争当事者
- 5 紛争ワーカー：客観性についてはどうか？

### 対話

- 6 対話：紛争ワーカーの道具
- 7 対話：別々か、または一つのテーブルを囲んで全当事者でか？
- 8 対話：状況設定への考察
- 9 対話：深い社会的展望
- 10 対話：長期間の展望

### 紛争の理論

- 11 紛争の理論：姿勢（Attitude）と行動（Behaviour）と矛盾（Contradiction）の（A B Cの）三角関係
- 12 紛争の理論：当事者と目標——初歩的なものと複雑なもの
- 13 紛争の理論：基本的に必要なもの、基本的な権利——基本的な紛争とは
- 14 紛争の理論：撤退・妥協・超越
- 15 紛争の理論：暴力前—暴力最中—暴力後と創造性

### 紛争の実践

- 16 紛争の実践：共感—非暴力—創造性の三角関係
- 17 紛争の実践：態度を和らげるための共感
- 18 紛争の実践：行動を和らげるための非暴力

- 19 紛争の実践：矛盾を和らげるための創造性
- 20 紛争の実践：創造性の根源について

### 暴力の理論

- 21 暴力の理論：直接的暴力と構造的暴力と文化的暴力の三角関係
- 22 暴力の理論：直接的暴力——可視的効果と不可視的効果
- 23 暴力の理論：構造的暴力——悪構造はゆっくりと苦しめる
- 24 暴力の理論：文化的暴力——悪い文化は暴力を正当化する
- 25 暴力の理論：診断—予後—治療の三角関係

### 暴力の実践

- 26 暴力の実践：診断、直接的暴力の根源
- 27 暴力の実践：直接的暴力、悪い行為者、凶悪犯、暴漢
- 28 暴力の実践：構造的暴力、支配（P）と分割（S）と分断（F）と周辺化（M）のP S F M症候群
- 29 暴力の実践：文化的暴力、暴力認識的な選民意識（C）と栄光（G）とトラウマ（T）のC G T症候群、そして認識的な二分法（D）と善悪二分説（M）とハルマゲドン（A）のD M A症候群
- 30 暴力の実践：早期の警告、早期の行動による予後

### 転換

- 31 転換：ほかに選択の余地はない
- 32 転換：態度を変化させるための共感
- 33 転換：行動を変化させるための非暴力
- 34 転換：矛盾を変化させるための創造性
- 35 転換：ある紛争を他におきかえる？

### 平和の対話

- 36 平和の対話：主流派のタテ軸アプローチ
- 37 平和の対話：革新派のヨコ軸アプローチ
- 38 平和の対話：社会的分析
- 39 平和の対話：紛争の結果なのか、紛争のプロセスなのか？
- 40 平和の対話：ストレスと緊張への対処

### 紛争の転換

- 41 紛争の転換：力と社会的断絶の紛争
- 42 紛争の転換：力と世界の断絶の紛争
- 43 紛争の転換：個人内部の紛争
- 44 紛争の転換：個人同士の紛争
- 45 紛争の転換：超越の紛争への提案例

### 平和の転換

- 46 平和の転換：平和教育、パートナーとしての人間
- 47 平和の転換：平和ジャーナリズム——パートナーとしてのメディア
- 48 平和の転換：暴力後の再構築
- 49 平和の転換：暴力後の和解
- 50 平和の転換：転換を可逆的にすること

紛争ワーカー・平和ワーカーのための規約：12のなすべきことと、12のしてはならないこと。

# アプローチの要旨

この要旨は、目次の論理的流れに沿っています。「一目で見る超越法 (トランセンド・メソッド)」(34～35ページ) もまた別の形での要旨になっています。

## 紛争ワーカー

I 紛争ワーカー (平和ワーカー) とは、あくまでも外的な存在として紛争の転換にかかわる人を意味します。思いやりと忍耐をもって、人間として、また同輩として、紛争の知識とスキルを導入する人びとです。ただし、あくまでも第三者として行動し、隠された思惑があってははいけません。

## 対話(ダイアログ)

II 対話は、紛争を探求するための道具です。一度に一つの側とのみ行い、相手を負かしたり、説得するためのものではありません。それは、継続的な創造的集団思考法 (ブレインストーミング) のプロセスであり、時間と質疑応答が公平に共有され、つまり、率直に、遠慮のない、如才のない、慎重な、そして「正常な状態 (ノーマル)」のことを意味します。紛争対話において、敬意はどのパートナーに対しても不可欠です。紛争のただなかにいる人びとにとっては、それは非常に重大なことであり、そのことでとても苦しんでいるのです。また、彼ら・彼女らは、よく教育を受けていることが多く、知識もあり、経験も豊富でありながら、紛争のなかで出口が見えなくなっています。ですから、彼ら、彼女らから、一緒に建設的な方向にもっていくための敬意と公平さを求めましょう。紛争・平和ワーカーは、偏見なく、純粹に紛争に接していくために、紛争の、特にどの派だとかどの問題だとか、限定・特殊化することは避けましょう。質のよ

い対話、そして関与をめざすのであって、ただ単に「高いレベル」をめざすのではないということです。レベルにかかわらず、だれに対しても同じように接しましょう。おのおのの対話を大事にしましょう。場はどこでもよく、たとえ「高いレベル」の場でもよいのですが、時間の制限はなしにするのが一番よいでしょう。また、レコーディングや、記録を取る場合は、同意を得てからにしましょう。

### 紛争の理論

Ⅲ 紛争とは、破壊者であると同時に創造者でもあるのです。また、その暴力性のために、現在も将来も潜在的に危険なものとされていますが、反対に、新しい何かを創り出すすばらしい機会でもあると認識しましょう。

### 紛争の実践

Ⅳ 紛争の実践には、共感、非暴力、創造的なアプローチが必要です。心からパートナーのことを理解し本人の論理を感じることに、妥当な目標を決めそれを達成するために非暴力的アプローチをとること、相容れないものを超越（トランセンド）する道を模索するためにすべての側から創造性を引き出すことが重要です。

### 暴力の理論

Ⅴ 直接的、間接的に害を与える、直接的、構造的、文化的暴力があり、またそれらを正当化する文化があります。

### 暴力の実践

Ⅵ 文化、構造、行為者（アクター）、転換前の紛争における暴力の根源（ルーツ）を明らかにすることです。早期に警告を出すことです。

### 転換（トランスフォーメーション）

Ⅶ 転換以外に適切な方法はありません。暴力的な態度やふるまいを変

えること、矛盾したものに創造性を適用すること、などです。

## 平和の対話

Ⅷ 平和の対話とは、診断、予後、そして療法すべてを探求することです。一次元（直線的）を避け、行ったり来たりするような対話の形を作ることです。つまり次のような継続性、関連性をもつことです。過去の治療法の何がいけなかったのか、何をすればよかったのか、予後、診断、そしてこれからの治療法などを考察します。種をまき、アイデアを育てます。国家システム、民族システムの古くさい記号を明らかにし、創造者である紛争のポジティブなイメージと、破壊者である紛争のネガティブなイメージを区別し、新しい記号作りにおける協同の役割を強調し、いつか「話しあいのテーブル」についてそれぞれの側がミーティングをできるように準備することが大切です。

## 紛争の転換（トランスフォーメーション）

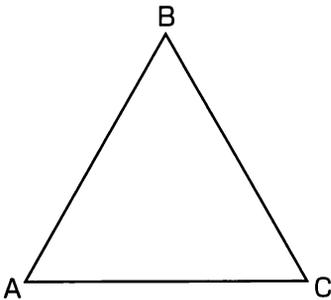
Ⅸ 紛争の転換は、原則的には、地球レベル、社会レベル、個人同士のレベル、個人内部のレベルなど、どんなレベルの紛争（葛藤）においても可能であるべきです。

## 平和の転換

X 平和の転換はまた、平和教育、平和ジャーナリズム、暴力後のワークの継続、そして平和合意の再開の準備などによる平和な環境づくりを前提としなければなりません。

## 序 論

# 紛争の理論と実践——ある展望



**A : Attitude**

態度（憎悪、不信感、無関心）——共感

**B : Behaviour**

行動（身体的・言語的暴力）——非暴力

**C : Contradiction**

矛盾（閉塞、妨害）——創造性

紛争には独特のライフサイクルがあり、まったく有機体のようなものです。出現すれば、感情的な、ときには暴力的な頂点に達し、次第に減衰し、そして完全に消えていく。しかし、それは往々にして再出現するものでもあります。これにはちゃんとした理由があります。つまり、個人個人や集団（民族や国家）には目標があるからです。

■ これらの目標は、相容れないものであり、さらにまた排他的なものです。たとえば、二つの国家が同じ土地をほしがったり、二つの民族が一つの国家を取りあうときです。

■ 目標が相容れないとき、矛盾、すなわち問題が生じます。

■ 基本的なニーズや関心のような、根本的・初歩的目標であればあるほど、実現されていない目標を掲げる行為者や当事者、国（パーティー）はさらに欲求不満がつります。

■ 欲求不満は攻撃につながる可能性があります。内には憎悪の態度、外には口頭的・物理的暴力の行動へ変容します。

■ 憎悪や暴力は、目標を掲げ、じゃまをする者に向けられることがあるかもしれません。ただし、それはいつもそれほど合理的、理性的なもので

はありません。

■暴力は（自身も含めて）害を及ぼし、傷つける目的で発生します。また、防衛や復讐のかたちをとって、らせん形の対抗暴力を生む可能性があります。

■この暴力のらせんは（癌の転移のように）メタ・コンフリクトになっていきます。そうなると、保護したり破壊したりする目標をはるかに超えてしまうのです。

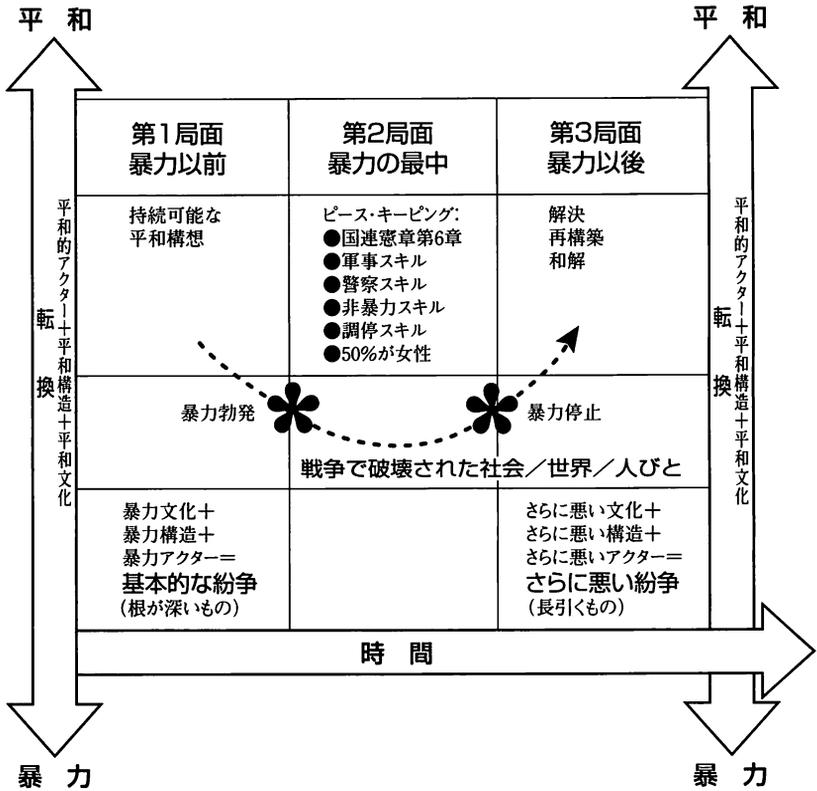
このように紛争は、盛衰や消滅や再生を経ながら、永遠の命をもつ可能性があります。もとの紛争は単なる背景の一部のように後退してもいきま  
す。ちょうど、冷戦期にもっとも注目を浴びたのは、破壊の手段である核ミサイルであったように。

同様の当事者や同様の目標が絡んでいるために、たくさんの当事者やたくさんの目標を含んだ、複雑な紛争の形成へと、継続的に、または同時に諸紛争が組みあわさっていくことがあります。二者の当事者が一つの目標を追求しているという基本的な紛争形成は稀です。つまり、教育学的目的や、極端に対立した憎悪と暴力による単純明解な紛争の形成でもない限り、そんな単純なものではないのです。普通の紛争は、たくさんの行為者がいて、たくさんの目標があり、たくさんの問題を抱えています。それは、とても複雑で、簡単に図表化できないものです。しかし、図表化して説明することは必要でもあります。

### 紛争のライフサイクル

紛争を三つの継続的な局面に分類してみましょう。暴力勃発と停戦を境にして、暴力以前、暴力の最中、暴力以後となります。これは、暴力というものは避けることのできないものとか、紛争イコール暴力や破壊である、と言っているものではありません。

$$\boxed{\text{紛争}} = \boxed{\text{A：態度（憎悪）}} + \boxed{\text{B：行動（暴力）}} + \boxed{\text{C：矛盾（問題）}}$$



これら A、B、C については、三つの局面すべてにおいて考えねばなりません。

この図はややこしいものに見えるかもしれませんが、実のところは非常に簡潔です。横軸は時間を表します。いわゆるギリシャ的に言えばクロノスであり、物理的に流れる時間のことです。次に、二つのカイロスのポイントがあり、時間の流れを中断します。暴力の発生と暴力の休止（停戦）の二つです。これらが重要なポイントであることに疑いの余地はありません。

しかし、その暴力が発生する前にも紛争は存在していたのです。紛争のワーク（紛争解決への努力）における四つのポイントとは、①男らしさ優位論のように暴力を正当化する暴力の文化、②人びとを搾取・抑圧し、疎

外する暴力の構造、③傷つけたり害を与えたりすることを気にしない、弱者いじめをする暴力的行為者、そして、④注意されずに放置された基本的紛争が集結し、形成されていく過程、の四つです。

13ページの図は、それら三つの局面において何をすべきかを示しています。このマニュアルは第1局面を中心にあつっていますが、第2局面と第3局面に関しても少し言及しています。

## I 暴力以前

ここのセクションを「予防」の局面として書いていくのは非常に皮肉な感じがします。「予防」とは暴力を避けるためのものだからです。基本的な紛争は、もっと真剣に注意されるべきものです。なぜなら、人はすでにこの時点において苦しんでいるのです。さらに、紛争自体が関係者全員へのいわば招待状なのです。それは、社会や全世界が、その事態が提起する問題にこたえて、共感（すべての当事者への）の態度と、非暴力（これから紛争の転移というメタ・コンフリクトに進展していく可能性を予防する展望をもって）と創造性（出口を探すための）をもって、前進していくことを要請する招待状なのです。

ここで行われなければならない仕事とは、その紛争を転換（トランスフォーム）することです。上向きに、積極的に、すべての当事者にとって前向きな目標を探すために、暴力に頼ることなく、想像力を働かせて転換することです。暴力につながっていくような紛争の転換は、失敗だといえます。暴力の行為はどんなものであれ、その人間にとっての失敗のモニュメントということになるでしょう。

図は、ここでの局面における、暴力構造の四つのポイントを示唆しています。暴力は、次に述べるもののなかに根をおろしている可能性があります。暴力を肯定（正当化）する暴力文化、暴力の構造（抑圧の構造、搾取

や疎外の構造、一緒にいたいという人びとを離れ離れにしておくという構造、また反対に離れていたい人同士をくっつけておくという構造)、そして暴力（勇敢さを見せつけるとか、権力を手に入れるとか）や憎悪（他のグループに対する自身のアイデンティティーを確立するための）に魅せられた暴力行為者（アクター）たち。憎悪や暴力の傾向が増すにつれ、共感、非暴力的アプローチ、そして創造性は、さらに欠くことのできないものになっていきます。しかし、紛争が深刻な対立によって形成されている場合——そういうときこそがこれらの要素が必要とされるときなのですが——、これらの能力が現れ、育成され、花開く、というようにはなかなかならないのです。

しかし、紛争そのものを忘れないで下さい。お互いの進むべき道に存在する目標を。それらの紛争は、暴力文化、暴力構造、暴力の行為者を一同に会させます。どんな油断であれ、危害と傷害を増大させるかもしれないのです。

**具体例——ドイツ在住トルコ人の「外国人労働者」問題（ドイツの市民権を所持している人も多い）についての、最低限の四つの焦点プログラム**

### **(1) 文化面への焦点**

文化面においては、主に強硬派のナショナリズムがあり、「ドイツはドイツ人のためのものであり、トルコ人はトルコに帰れ」というようなものや、暴力の文化があります。そこでは、紛争とはすべての当事者（パーティー）に納得のいくように解決するものではなく、勝たなければ意味がないものとしてとらえられています。そのような文化を見直していくことは必要ですが、しかし非常に時間のかかることです。失われていた平和の文化がとって代わらねばなりません。

### **(2) 構造面への焦点**

たいていの場合、搾取と過剰な親密さが共存しています。ここでは国家

同士が会って問題を解決するという集団関係審議会のような平和の構造が存在しないのですが、そうした平和の構造が、加速する暴力によってさらに手に負えなくなる前に、導入されなければなりません。

### (3) 行為者への焦点

行為者たち自身が、暴力を使う準備ができていて、と公表するがゆえに、そういうレッテルを貼られてしまうことがあります。それらを真剣に受け止めて、その状況のすべての側面について対話するようにしましょう。彼ら、彼女らを見捨てると、さらに手におえなくなってしまうでしょうから。暴力がおこってしまった場合、彼ら、彼女らを刑務所に閉じ込めておくという法的なプロセスでは不十分です。もし犠牲者や犠牲者の家族との対話ができなくても、同じ民族の人びとと対話をする必要があるのです。

### (4) 紛争への焦点

学校教育、住居、そして仕事の機会の少なさ、アイデンティティーへの脅威なども問題にすべきです。どんな国においても、外国人の受け入れには明らかに上限があります。その限度ぎりぎりは、決して強硬なナショナリズムへの譲歩である必要はなく、また、その上限を緩めよという外部からのプレッシャーに対しての譲歩でもありません。強硬な民族主義（ハード・ナショナリズム）に根ざすアイデンティティーこそがもっと問題を含んでいるのです。私たちの世界はどんどん小さくなっていくばかりですが、そこにはもう、（ハードでなく）ソフトなナショナリズムの居場所しかありえないのです。そして、そこには他者への関心と対話への道筋しかないのです。

つまり、私たちがしなければならないことは明確です。紛争のプロセスを上向きに矯正し、それを「平和の領域」に迎え入れること、そして、文化、構造、さらに行為者たちをもっと平和的にすることです。そうするこ

とによって紛争は、暴力的手段なしに対処されるようになります。全体の紛争シンドロームは、図の上半分にあるように、「転換」(トランスフォーム) されて組み込まれていくでしょう。そしてそれが、本来あるべき姿なのです。

具体的に、平和的な文化に焦点を当てることは、人権の伝統を持ち込むことになるでしょう。そして、それはまた民主主義的な伝統をも呼び覚ますでしょう。その両方ともが、広義のアプローチの有益な例となります。しかし、それらは、たとえば文化の相違を考えるとそんなに簡単ではありません。というのは、これらの伝統は、個人主義、個人の権利や個人の考え方、選挙に投票して自分の一票の存在を大事にする、といった点を強調する西洋的な「私 (I)」文化にはとても適していますが、グループ (一族・部族・民族) と、集团的権利と合意のための対話などを重んじる「私たち (We)」文化にはそれほどなじまないからです。

平和的行為者たちに焦点を当てることは、女性や、宗教界・知識層・商業の伝統の世界からの行為者の参加をさらに促進させるでしょう。一方、貴族的、戦士の伝統にある行為者の数は減っていくでしょう。そして、紛争そのものを「超越」するに十分な共感と非暴力と創造性を起動していく要素になるでしょう。それは、それぞれの当事者と別々に対話することもあるし、あるいは直接的に「テーブルに集って」の対話によることもあります。

構造的暴力は、直接的暴力と同じくらい、あるいはさらによくありません。政治的な抑圧、経済的な搾取、あるいは同じ仲間だと認識する人びとと一緒にいる自由を奪われている、あるいは好きでもない人びとと一緒にいることを強要される、というような理由で、死んだり、惨めな人生を送らねばならない人びともいます。これから起こるかも知れない直接的暴力への「早期の警告」としてこのことに言及するのは、すでに述べたよう

に、すでに苦しみのなかにいる人びとにとっては、皮肉っぽく、失礼なことかもしれません。直接的暴力は警告と考えるべきです。しかもその警告は、もう手遅れなのです。つまり、皮肉な行為者たちに搾取された耐え難い構造的、文化的諸条件は知らないうちにすでにあって、そのあとにやってくる直接的暴力は、それらのことを気づかせるにはもう遅すぎるものなのです。

そして、このことによって私たちは、開発についても、もうひとつの見解をもたねばならないことに気づきます。伝統的な見解では、先進国を発展途上国のモデルとみなし、前者の持っているものを後者が持たない場合、それは不足分として考えられてきました。ですからその不足分については、(たとえば輸出などの) 自らの稼ぎによって、また補助金や貸付金などを使って、お金を得て、途上国がもっと発展するために必要なモノを先進国から輸入するというやり方で対処してきました。

しかし先進国は、もともと輸入の代わりになるように自ら生産し、発展してきました。不足分を減らすための輸入は、ともすれば移植の成功しなかった、あるいは、しばらくして拒絶反応をおこした臓器のようなものです。さらに、どんな輸入であれ、ある人びとは利益を受けますが、別の人にとっては打撃をこうむることになるのです。文化や構造に無頓着であるために紛争が起きざるを得ず、それに引き続く軋轢と暴力が起これば、物質的利益を放棄する以上のことになるでしょう。

開発のより基本的な定義は次のようなものであるといえます。すなわち、開発とは紛争を「転換」する能力を育てることだ、と。

学校で働きかけ、暴力を賛美や神秘化せず、共感、非暴力、創造性をもって紛争に対処する方法を養い、文化的暴力を減らすことです。

また、1966年に国連総会で採択された抑圧と搾取に反対する「国際人権規約（市民的及び政治的権利）」と「国際人権規約（経済的、社会的及び文化的権利）」（いずれも日本は1979年に批准）を通して、構造的暴力を減らすことです。

これは、先に述べた経済発展のための代用品ではありません。文化的、構造的再建を経て、社会はもっと意義のある経済発展への心構えができるということなのです。何百万という人びとの生活を改善する余地のあるプロジェクトは、よりよい土壌に根づくべきです。ですから、第1局面は、三つのRを含んでいます。解決（Resolution）、再建（Reconstruction）、和解（Reconciliation）です。つまり、暴力がその猛威をふるうのを待つのではなく、また、暴力が消えるまで待たなくてもよいのです！

## Ⅱ 暴力の最中

暴力の起こっている最中は、いうまでもなく、その暴力を止めることが先決です。というのは、暴力そのものがよくないことであるし、また、それはもともとの紛争をもっとややこしくしてしまうからです。しかしまず、なぜ人類が第1局面から第2局面へ移行をするのか、ということに関して考察しておくことも大切です。

一つめの答えは、もともとの根本的な紛争そのものに理由を求めます。すなわち、暴力とはそもそも、ある当事者の目的を押しつけるために他の当事者を無力にするために利用されるものだということです。これは、時々「軍事的解決」と呼ばれるもので、「解決」という言葉が「容認できる」ということを意味するのならば矛盾した語法であります。

二つめの答えは、同じようにもともとの紛争に理由を求めるのですが、一つめほど理性的ではありません。それは、攻撃は欲求不満や誰かに邪魔されることから生じ、また、暴力は憎悪から生まれるという考え方です。

三つめの答えは、メタ・コンフリクトの論理から出てきます。紛争は、勝利による名誉と栄光を得るためのもの、また、勇気をひけらかし、勝利していないときでさえも名誉と威厳を獲得するための機会である、という考え方です。

四つめの答えもメタ・コンフリクトから出てきます。現在また過去の両方で苦しんだ暴力への復讐としての暴力という考え方です。

これら四つの考え方を真剣に受け止めなければなりません。しかし、暴力は、食欲や性欲のように人間の本質に内在している、という確固たる証明はどこにもありません（訳者注——『暴力についてのセベリア声明』参照／学習用小冊子は平和文化刊）。食欲や性欲に関しては、どこであろうといつであろうと、人類が存在する限り容易に見られるものです。これらの衝動は抑圧されていることもあります。しかし、食欲や性欲には普遍性があるという証明にいきつきます。一方、暴力は、いつでも可能性としてしか存在しません。そして、その可能性は次のようなときにしか活性化しないのです。

（１）基本的な紛争が無視されたまま放置されていて（負の理由）、共感・非暴力・創造性が、結果を出すために、あるいは欲求不満から、欠如している。

（２）紛争からメタ・コンフリクトへの移行を、暴力によって名誉を得ようとする機会として文化が正当化する、または文化が、暴力の償いとしての暴力を正当化している。

結論は明白です。基本的な紛争は、ケガをした場合のように、無視・放置されるべきではありません。暴力は正当化されてはなりません。

しかし、暴力はいつまでも永遠に存続したり広がったりするものではありません。

りません。そうでなければ、もうこの世に人類は存在していないでしょう。暴力は、たとえば次のようなものを交戦国が使い果たす、あるいは、なくすことによって弱まっていきます。

- (1) 破壊の手段 (ハードウェア=武器、ソフトウェア=人力)
- (2) 破壊する標的 (物、人)
- (3) 破壊しようとする意欲 (「闘争心」の低下、厭戦気分)
- (4) 勝利への希望、それぞれの当事者 (国) が憶測する同じ結果

このことによって、暴力を消滅させるための四つの方法が考えられます。①武器や傭兵の出入港禁止、②人間を避難させ標的を取り除くこと (焦土作戦)、③良心的兵役拒否を誘発するように、暴力の引き起こす目に見える、あるいは見えない結果を明らかにすることによって兵士たちの士気をくじくこと、④らせん状にエスカレートする暴力によってすべての当事者 (国) が長い時間のなかで敗者になるということを示すこと、の四点です。

(5) しかし、当事者間の仲裁の第五の可能性もあるのです。もし、平和的手段による平和ということを考えるのなら、国連憲章の第7章ではなく、第6章のもとで平和への道を開くでしょう。図にあるのは、平和維持活動は、軍事的理由づけや暴力的手段だけでなく、警察スキル、非暴力スキル、そして、調停能力における、専門技術・知識を呼び覚ますことで、改善できるということです。

女性は、ハードウェアよりも人的なものの分野を得意とする傾向にあるので、この構成部分における50%を担うことができるでしょう。さらに、その範囲ももっと増やすべきです。つまり、国連平和維持軍男性隊員のブルー・ヘルメットだけでなく、女性によるブルー・カーペットを緻密なものにし、闘争の余地がほとんどないようにすべきなのです。ここで、平和維持 (ピース・キーピング) はまた三つのRを含んでいます。再構築 (Reconstruction)、和解 (Reconciliation)、そして解決 (Resolution) です。

暴力そのものが「過ぎ去る」のを待っていてはいけません。

### Ⅲ 暴力以後

暴力が去ったという安心感は一瞬から、暴力の見えざる、長く続く効果（さらなる栄光や復讐へのトラウマや欲求など）、また文化、構造、行為者たちがさらに暴力的になるかもしれないということを見えなくしてしまうかもしれません。つまり、ここからの仕事は暴力以前よりもっと難解で複雑なものになるのです。単なる、暴力以後の再構築（Reconstruction）、負傷者のリハビリ（更生・社会復帰）や物質的なダメージの再建などは非常にむずかしいことで、メタ・コンフリクトを解決するための和解（Reconciliation）や、もともとの紛争そのものの解決のための解決（Resolution）策は忘れられたり、延期されたりし、将来的にも放置されるかもしれません。

行わなくてはならない仕事は莫大にあります。

#### 暴力以後の再構築（Reconstruction）の概観

- 再生リハビリ：トラウマと集合的悲痛アプローチ
- 再建：開発アプローチ
- 再構成：平和構成アプローチ
- 再文化：平和文化アプローチ

#### 暴力以後の和解（Reconciliation）の概観

- 賠償：返還アプローチ
- 謝罪：許しアプローチ
- 神学的：改悛アプローチ
- 司法：懲罰アプローチ
- 相互起因：カルマ（業・因縁）アプローチ
- 歴史的：真実委員会アプローチ

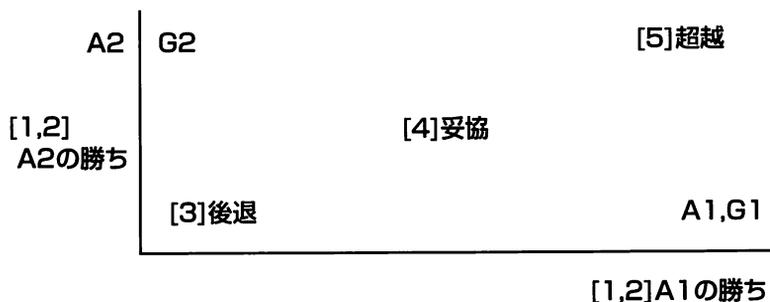
- 劇場的：追体験アプローチ
- 共同悲しみ：ヒーリングアプローチ
- 共同再構築アプローチ
- 共同紛争解決アプローチ

世界は、これらの課題のほとんどに対して、まだまだ十分な備えができていません。暴力に対する「事後処理（『戦後処理』など）」はありますが、暴力の根源をもとからなくしていくものではありません。このことが非常に重要であるという理由は簡単です。「暴力以後」という表現自体、楽観的すぎます。基本的な紛争の根本についてなにもせず、紛争を転換しないでいると、以前の暴力の恐怖が記憶からぬけ去って、ただ潜在意識のなかにしかなくなったとき、暴力が再び生み出されるのです。「戦後」だと思っていたのに、いつの間にか次の「戦前」になってしまうように、「暴力以後」はいとも簡単に「暴力以前」に早変わりしてしまうのです。

# 紛争の結果と紛争の過程

さて、練習問題です。テーブルの上に一つのオレンジを置き、そこに二人の子どもが座ります。さて、なにが起きるでしょうか？ 考えつだけのアイデアを出してください。たいていの人は16ほどの可能性のうちのせいぜい8つ以下しか思いつかないものです。無理をしなくてもいいです。

図1 紛争——五つの基本的な結果



(A=行為者、G=ゴール・目標)

図1は二つの当事者における紛争の場合の五つの一般的な結果のタイプ分けを表しています。ここでは、[1]と[2]は同じで、両方とも片方の当事者が勝者になるということを意味します。具体的な紛争においては、おのおのの一般的なタイプには数個の特定の解釈ができます。

## [1、2] 片方の当事者が勝者になる場合

人のルール：戦い抜くこと。力は正義なり——避けるべきこと。

法のルール：裁く（判決する）こと。（必要性や文化的優先、志向のよう

な) いくつかの原則。

偶然のルール：無作為による方法（クジ・サイコロなど）。

補償：（三角形を）拡張すること、（二重の紛争を）深めること。

### 【3】 撤 退

その事態から立ち去る。

オレンジを破壊するか渡してしまう。

オレンジを見つめるだけにしておく。

オレンジを冷凍庫にしまって凍結する。

### 【4】 妥 協

オレンジを切る。

オレンジを搾る。

オレンジをむいて、房ごとに分ける。

ほかの分け方。

### 【5】 超 越

オレンジをもう一つ入手する。

オレンジをもっとたくさんの人と分け合う。

オレンジケーキを焼いて、くじを作って収益を分け合う。

オレンジの種をまいて、果樹園をつくり、市場に持っていく。

**基本的なポイント**——論点・命題は選択肢があればあるほど、暴力の可能性が減少するということです。

超越法（トランセンド・メソッド）は超越（トランセンデンス）するという意味で特徴があります。あるものを超えようとする、紛争をそれが存在するところから「取り除き」、それを他の場所へ移して「固定する」のです。あの一つのオレンジを超えて、もう一つオレンジを手に入れるのです（「先生、オレンジを一つ忘れましたね！」）。あるいは、そのオレンジのいちばん大切な部分である種に重点をおき、その種を植えることです。

基本的な紛争の結果についてはさておき、紛争における基本的な過程やアプローチについて考えましょう。それらは次のことがらのどれかに関係しています。

**第1の論点** 暴力は[1、2]の片方の側が勝者になる場合にエスカレートしていく傾向にある。

暴力は、勝利者の、敗者に対する要請を強要するために利用される。強い者が勝つのであり、暴力がそのプロセスとなる。

**第2の論点** 審判することもまた、[1、2]の片方の側が勝者になる場合にエスカレートしていく傾向にある。

審判することは、だれが正しいか（無罪、責任がない）を決定するのに利用される。

正しい者が勝つのであり、審判がそのプロセスとなる。

**第3の論点** 言い逃れをすることは[3]の撤退にエスカレートしていく傾向にある。

撤退は機がまだ熟していないことを示し、現状維持が好まれるということ。

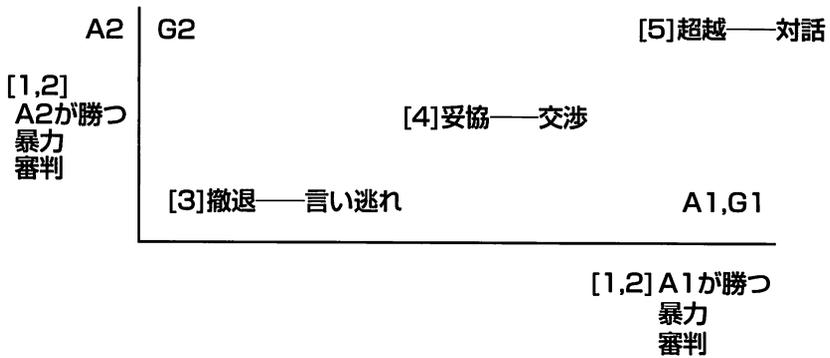
撤退するためには、言い逃れがそのプロセスになる。

**第4の論点** 双方の間の交渉は[4]の妥協に発展していく傾向にある。妥協は、つまり片側を認めることは、指図（命令）することではない。妥協を得るためには、交渉がそのプロセスとなる。

**第5の論点** おのおのの側との対話は[5]の超越に導いていく。超越とは新しい状況を設定・定義していくことである。紛争を超越するには、対話がそのプロセスになる。

いいかえると、結果はすでにそのプロセスのなかに隠れているのであり、どのプロセスが選ばれるかは、紛争において求められる結果によって決められるものなのです。

図2 紛争結果と紛争過程の関係性



(A=アクター、G=ゴール)

では、根本あるいは本来の紛争と、「メタ・コンフリクト」の間の区別・整理にもどりしたいと思います。

根本の紛争とは、何らかの結果、解決法、出口、変容・転換（トランスフォーメーション）などと呼ばれるものを見つけることです。メタ・コンフリクトとは、本質的にある一つのことについて、勝つことだけを目的とします。たった一つだけの結果が求められるのです。すなわち、一部の当事者が勝者になるのです。メタ・コンフリクトは、物理的な手段、暴力、戦争で戦われるもので、たいていの場合、片方にとっての勝利、もう片方の敗北というかたちに展開していきます（めったにないことですが、引き分け、たとえば戦闘が長引いた場合など、のケースもあります）。

あるいは、法廷などで、言葉によって争われる場合もあります。しかし、これもまた同じような構造になっています。判決というのは、だれが正しく、だれが有罪で、責任があるかを決定するやり方です。これは、他の三つの結果のタイプを得るにはよいプロセスではありません。たいていの場合、勝者を定義する決定というものは非常に一方的です。

メタ・コンフリクトは往々にして、もともとの紛争を決着するために利用されます。勝者がすべてを得る、もともとの紛争において論争されたものも得るのです。この結果は受け入れられ、持続するかもしれません。しかし、それはまた、そうではないかもしれません。メタ・コンフリクトはただの物理的な、そして法的な力の誇示でしかないのかもしれないのです。そして、片方にのみ都合のよい決定はどんなものであれ、単純すぎ、不平を招くものであるように聞こえます。しかしまた、一部の当事者が単純に正しいというタイプの紛争が存在しないわけではないのです。また、戦闘より法廷の方がよいというわけでもないのです。

撤退は、短期間には事無きを得ます。しかし、遅かれ早かれ紛争・対立は引きつがれねばならないのです。伝統的なアプローチとは当事者間の交渉です。しかしそこにある問題は、両者がその交渉のテーブルを言葉による戦場にし、よくてもだれをも満足させ得ない単純な妥協案で終わってしまうこと、そして、その機会を一步前進させることに活用できなくする可能性があるということです。このため、第五の結果、超越すること、上をいくことが注目されてくるのです。最良の方法論はお互いの対話です。それもはじめは紛争ワーカーを介したものがさらによいでしょう。では、それについて述べていきます。

# 訓練者のためのポイント

自習の場合は学習者自身がトレーナー（訓練者）になります。

1 出発点にふさわしいものはフロー・チャート（32～33ページ）です。これは目次の構造を明確にさせます。このフローチャートと目次をOHP用紙で用い、参加者に目次を矢印でたどらせましょう。基本的な点は下部と上部を区切って区別することです。下部は「問題点」、つまり紛争や暴力、上部は「それに対してすべきこと」、つまり対話、平和のための対話、転換（トランスフォーメーション）で、これらは紛争と平和の転換で終結する筋書きになっています。アプローチの概要もこれにつけ加えておくと、次のセクションへの橋渡しになるでしょう。

2 「一目でわかる超越法（トランセンド・メソッド）」（34～37ページ）は、現実社会の例もついています。1997年にこのマニュアルがテストされたときに使われた練習問題のうちの一例、ペルー人質事件も含まれています。この126日間の危機は、1997年4月22日の襲撃で幕を閉じました。終結は結局、一人を除いてすべての人質が解放され、トゥパク・アマルの全メンバーが殺害され、二人の突撃隊員の命が失われたというものでした。この結末についてはほとんどの人が満足していないようです。この練習問題のポイントは、何か別のかたちで事態を收拾するヴィジョンをもつということです。この例は、いくつかの現代の実践と、もっと望ましいプロセス（過程）や結果の間に、距離があることを示唆しています。プロセスや結果がどれくらいの実現可能性があるのか、ということも討論のよいトピックになるでしょう。トレーナーはよい討論が行われるように、ほかの例もつけ加えたり、代用したりするとよいでしょう。

3 「序説 紛争の理論と実践——ある展望」（11～23ページ）は基本

的な序論的文書です。OHP用紙をⅠ～Ⅲの各局面に活用して下さい。そして各局面で課せられた問題への参考にして下さい。

4 「創造性、超越（トランセンデンス）、そして紛争の転換」（43～52ページ）については、トレーニングの間どこでも討論して下さい。特に、4～6ページに示されている《参加者マニュアル【完全版】の構成》のうち、19、20、34、45のユニットに関連して議論して下さい。

5 トレーナーのマニュアルには参加者マニュアルのほとんどの練習問題についての注釈がついています。50ユニット分です。

6 さいわいなことに、たった15ユニットの短いバージョンのトレーナー用マニュアルもあります。ユニット番号1、5、6、7、11、12、15、16、22、38、46～50です。

この短いマニュアルには、紛争ワーカーと対話（各2ユニット）、紛争の理論（3ユニット）、紛争の実践（1ユニット）、暴力の理論（1ユニット）、平和の対話（1ユニット）、そして最後に平和の転換（全5ユニット）が含まれています。まず、これを試してから他のユニットをつけ加えるのもいいでしょう。

7 超越法のトレーニングに必要だと見積もられる時間。

■長期、完全版 1日に2セッションずつ、1週間で10セッション。1回のセッションに1セクションをカバーする。そして序論的な教材は広げます。

■短期、省略版 2日以上かけて4セッション。1セッションかけて序論を。その後各セッションに5ユニットを。

■簡略版（本書を活用）、2セッション、「参加者とトレーナーのためのマニュアル：序論」（「紛争の理論」〈11ページ〉や「創造性の理論」〈43ページ〉も）。

■最小版、1セッションのみ、「一目で見る超越法と一つの例（36～37ページ）、フロー・チャートと目次（32～33ページ）」。

8 「二つの話：らくだ、数、その他いろいろなことについて」は、いつでもチャンスさえあれば実行して下さい。

# フロー・チャート

参加者のマニュアルは全部で50ユニットから成っています。それが10セクションに分かれていて、1セクションは5ユニットから成っています。以下の目次に分けられているので参照して下さい（4～5ページも参照）。

I	紛争ワーカー	5ユニット	1～5
II	対話	5ユニット	6～10
III	紛争の理論	5ユニット	11～15
IV	紛争の実践	5ユニット	16～20
V	暴力の理論	5ユニット	21～25
VI	暴力の実践	5ユニット	26～30
VII	転換	5ユニット	31～35
VIII	平和の対話	5ユニット	36～40
IX	紛争の転換	5ユニット	41～45
X	平和の転換	5ユニット	46～50

I まず最初に、紛争ワーカーの個人的な、そして社会的なプロフィール（経歴）が紹介されます。そして、紛争当事者たちとの関係性を明らかにします。

II 次に、紛争ワーカーにとって主たる方法となる対話が登場します。それは、会話形式だったり、ブレインストーミング形式（自由にアイデアを出しあう）だったりします。とにかく、その対話はディベート（相手を打ち負かすための討論）とは異質のものです。

III 紛争について、態度（Attitudes）、行動（Behaviour）、矛盾（Contradiction）などの紛争の理論における基本的な概念を探求すること

で、解説していきます。

Ⅳ 「紛争の実践」では、共感、非暴力、創造性などの紛争の実践の概念というところで、紛争ワーカーにも関係するものです。

Ⅴ 紛争には暴力が介入する可能性があるので、直接的、構造的、また文化的暴力などについての暴力の理論における基本的な概念を解説します。

Ⅵ これは、診断、予後、そして早期の警告における暴力の実践という内容で紛争ワーカーにも関係してきます。

Ⅶ 主たる論点は、暴力を未然に防ぎ、紛争の創造的な可能性を伸ばすために転換の必要性があり、それを詳しく見ていく必要があるということです。

Ⅷ これを実行するにあたって紛争ワーカーは社会分析も含めます。焦点をしぼった平和の対話へと進めていきます。

Ⅸ 全コースのゴールとして、紛争の転換が、地球規模でも、社会的にも、個人の間でも、また個人の内的なレベルでも探求されます。

X 平和の転換を達成するために、紛争の文脈が、教育やジャーナリズムなどといった手段によって導入されなければならないのです。

このマニュアルは二つの道筋をもってなされます。一つは、紛争ワーカー、対話の方法、そして転換の課題を導入します。もう一つは、紛争と暴力について、理論と実践の両方に焦点を当てます（下図右側）。両方が出会うのは、そのあとの紛争と平和の転換の部分です。

I 紛争ワーカー
II 対話
VII 転換
VIII 平和のための対話



III 紛争の理論
IV 紛争の実践
V 暴力の理論
VI 暴力の実践



IX 紛争トランスフォーメーション
X 平和トランスフォーメーション

# 一目で見る超越法【2ページ版】

**基本的な前提Ⅰ** ヒンズー教の見解には、「破壊者の源」「創造者の源」としての紛争、暴力の根源としての紛争、発展の根源としての紛争があります。紛争ワーカーは維持者としての第三者的な役割をもっています。展開を推進していく、暴力を避けて紛争を転換（トランスフォーム）するという役割です。

**基本的な前提Ⅱ** 仏教の見解には、相互依存による生成、すなわちすべてが相互の因果関係をもって成長していくという考え方があります。紛争（争い）にははじまりがなく終わりもない、私たちみなが責任を負うべきもの。一人の行為者（たとえば、ある政治家など）が一人で責任を負う（独裁や専売特許）のではなく、また一人ですべての罪をかぶるといふことでもないのです。

**基本的な前提Ⅲ** キリスト教の見解では、紛争の転換の責任は究極的には個人に課せられるべきであって、暴力でなく平和を促進するための行動を起こすという個人的な決定権をもっています。

**基本的な前提Ⅳ** 道教の見解には、すべてのものが、陰と陽、善と悪に分けられます。選抜された行動がネガティブな結果を生むことも、また反対に選抜されなかったことがポジティブな結果を生んだかもしれないことも、まったくありえることだという考え方があります。ですから、ひっくり返して考える必要性があるのです。

**基本的な前提Ⅴ** イスラム教の見解では、すべての人びとの幸福のための具体的な責任を果たすことも含めて、共通のゴールのために共同してすすむことからこそ強さが生じると考えるのです。

**基本的な前提Ⅵ** ユダヤ教の見解では、儀式的な決まり文句のなかに真実が存在するのではなく、そういった文句の内容へ到達するために必要な

対話のなかにこそ真実が存在します。この対話とははじまりも終わりもないものです。

**基本的な前提Ⅶ** これらすべてが大切です。特に、仏教とヒンズー教の ahimsa（非暴力・不殺生）と命の尊さ（神聖さ）の教えは重要です。

世界の宗教の見解は次のようなインスピレーションを与えてくれます。

1 すべての当事者、ゴール、問題点から紛争が形成される様子をはっきりさせます。

2 その紛争で重要な関与をしている当事者（考慮の対象からはずれていたような人でも）すべてを考慮に入れていきます。

3 すべての当事者と、非常に共感した、個人的な対話をもちます。

4 各紛争ワーカーごとに、一つの紛争当事者だけを専門に担当することがよいかもしれません。

5 このような対話では、すべての当事者に受け入れられるようなゴールを明確にします。

6 新しい見解を示す可能性のある（考慮の対象からはずれていたような）ゴールを考慮に入れます。

7 すべての当事者に受け入れられる、すべてを包含する上位のゴールを達成します。

8 短い、魅力あるゴールの形成を行います。

9 その共通のゴールのために各該当事者がなすべき課題が定まるよう援助します。紛争の存在しているところからそれを別のところへ移動させたり、忘れられていた当事者やゴールを持ち込んだりします。

10 その共通のゴールがいかにかすべての当事者のゴールを満たすことのできるものであるか、その実現性を検証します。

11 当事者たちが「テーブルについて」自立したプロセスで議論できるように手助けします。

12 紛争から身を引き、次の紛争を手がけ、いつ呼びもどされてもいいように準備します。

# 一目で見る超越法と一つの例

——ペルーの人質事件とその紛争転換——

1996年12月17日、ペルーの首都リマにおいて日本大使館の乗っ取り事件が起きました。次に記すのは、その紛争に関する六つの主たる当事者たちとその主な目標（ゴール）です。

## 1 トゥパク・アマール革命運動（MRTA、14人のゲリラ）

- MRTAのメンバー450人の受刑者の解放（最終的には30人まで減少）。
- ジングルから武装闘争を続けること。

## 2 残された72人の人質（他の者はすでに解放済み）

- 無傷で解放されること。

## 3 ペルー政府（フジモリ大統領）

- 受刑者たちを解放することでテロリズムに屈服しないこと。
- 無傷で人質を解放すること。

## 4 MRTAの受刑者たち

- 解放されること。
- 活動を続けること。

## 5 アメリカ合衆国政府

- ペルー政府のみならずだれもテロリズムに屈しないこと。
- 無傷で人質を解放すること。

## 6 日本政府

- 無傷で人質を解放すること。
- 日本の国外領域における権利が尊重されること、また暴力を使わないこと。

さらにここで、貧困をなくす方法を模索する「ペルーの社会」と、上記のすべてを考慮に入れる「世界の世論」があることを忘れてはならない。

すべてを包含する上位のゴールとは、貧困を減らし、それをなくすことであり、そしてもし、すべての当事者たちが少しずつ譲歩すれば、全員がそれなりの居場所を見つけることができるのです。

1 トゥパク・アマル（MRTA）は武装解除をして、メディアや選挙への参加などとともに、民主主義社会において政治的なプロセスをふむようにすること。

2 人質たちは解放され、貧困を排除する方法の模索に参加すること。

3 ペルー政府は、刑務所の状態を向上させ、刑を短くし、村や社会における生活向上のためのトレーニングを与え、MRTAを非暴力運動と認定し、貧困をなくすためにさらに努力すること。

4 MRTAの受刑者たちは、刑務所で村のワーカーやソーシャル・ワーカーとしての訓練を受けること、そして武装解除することを誓約すること。

5 アメリカ合衆国政府は、貧困をなくすためのプロジェクトに必要な資金や専門知識を調達すること。

6 日本政府は同様に、貧困をなくすためのプロジェクトに必要な資金や専門知識を調達することと、これからの天皇誕生日のレセプションは多数の出口があるホテルなどで開催すること。

これを達成するために、以下のA～Dの四つの二者会談は有益でしょう。

A MRTAとペルー政府間の直接的な交渉。

B 受刑者たちと政府間の直接的な交渉。

C 人質たちと受刑者たちが会って、共同の圧力グループを結成する。

D MRTAと人質たちが、ペルーの社会についての対話を試みる。

そして、当事者たちに信頼されている人びとを仲介人に選ぶこと（フィデル・カストロやローマ法王など）。

# 「紛争の理論と実践——ある展望」 に関するコメント

三つの局面の図（13ページ）は、練習問題全体にとって基本的なものです。しかし特に重要なのは次のことです。

■ 問題の根源というのは常に基本的な紛争です。それは暴力的文化、構造、そして当事者が何らかのかたちで無視され、苦しんでいる状態から起こります。

■ 行動を起こす信号として暴力を使うのは最悪の誤りです。というのは、暴力は有害で傷つけるものであり、それ自体がもとの紛争の論理から区別された理論をもっているからです。さらに悪いことは、当事者たちが「機が熟して」交渉にあたることができるまで、暴力をそのまま放置しておくことです。

■ 紛争の3局面においてなすべきことはそんなに違ったことではありません。それは、一つ一つの局面において別々のチームが順番に担当するというようなことではないのです。

三つのRすなわち、解決（Resolution）、再構築（Reconstruction）、和解（Reconciliation）はつねに何らかのかたちで必要とされる要素です。

■ 解決（Resolution）……根本的な紛争を解決する。

■ 再構築（Reconstruction）……すでになされた損傷を修復する。

■ 和解（Reconciliation）……過去からのものも含めてメタ・コンフリクトを解決する。

## 練習問題

第3局面（暴力以後）における和解への10の可能性を参照してください。何らかのかたちでの三つのRの全3局面における存在を確認しつつ、

第1と第2局面のための類似のリストに、考えつくことをとにかく書き連ねましょう。それから行動の具体的なプログラムをデザインしてください。

同じことが平和維持（ピース・キーピング）においても当てはまります。軍隊の強化などは暴力が勃発する前になされ、暴力を鎮圧してもすぐに撤退したりはしません。それはちょうど、よい警察隊が暴力とその再生を未然に防ぐことができるのと同じです。ことは暴力が起こってしまった直後の方が重要です。というのは、状況はたいてい後の方が悪くなっているからです。

■暴力は、栄光と復讐の夢をさらに生み出し、そのためにより悪い文化をつくり出します。

■暴力は、戦争の労力を支えるために抑圧や搾取をさらに生み出し、そして分極化（対立）や、より悪い構造をつくり出します。

■暴力は、暴力に対する敷居を低くし、平和的な行為者をも暴力的にさせ、より悪い行為者にします。

オレンジの例は、トレーニング・セッションをはじめるにあたって練習問題として使えます。ただし、そこには解答例が載っているので「参加者のマニュアル」はそのあとで配布するとよいでしょう。一度この練習問題を、イングランドの学校におけるいじめについての全国会議で試したことがあります。参加者は、子どもたち、親たち、そして教師たちでした。20名の参加者が任意に、二人一組になって、長いテーブルに向き合って座り、最年少の子どもがテーブルの一端に、もう一端に年配の親たちや教師たちが座って、その組ごとに討論をしました。

「オレンジ一個と二人の人間がいるとします。あなたなら、どうする？」については、実物がないと参加しにくいという心配があるかもしれません。（しかし、ある子どもが言ったことですが、「ただ、そこから去ってオレンジを放っておきます」という発言もあったのです）。ですから最年少の子

どもたちに機会を与えて、実際にテーブルに座らせることは、そんなに必要なことではないと判明しました。子どもたちは大人たちと同じか、それ以上にオレンジについての想像力があったのです。

ある人が、「力でそのオレンジをものにする」と提案したときは、隅っこに座って、最後には一個のオレンジを受け取り、「もっと創造的で、破壊的でない考え方」をもつようにと言われました。またほかのオレンジは、想像力にあふれた提案に賞品として使われました。最後に、16の結論の書かれたチャートが紹介され、出てきたものと比較されました。そうすることで、結果を分類化することをトレーニングしたのです。ポイントは紛争の想像力（イマジネーション）です。「力でオレンジをものにする」的な発想を超越すればするほど、暴力的でなくなるのです。暴力とは、紛争に関する無学、そして創造性の欠如など、ネガティブな要因をもっているのです。ですから、このアプローチの根本的なポイントは創造性を発展させることです。さらにオレンジの例はもうひとつのポイントを示してくれます。たった一人の人間にできることには限界があるが、数人よればもっとたくさんの考え方が生まれる、そしてもし、彼ら、彼女らが本当に、対話、ブレインストームをはじめたならば、さらなる結実が期待されるだろうということです。

四つまたは五つのタイプの結果の載っている図（[1]と[2]は勝利するものがどちら側かに関係のあるものなので、そのときだけその違いがでてくるもの）は、結果の分類を明確にするためにすべての紛争に活用できる基本的なものです。しかし、気をつけて活用しなければなりません。その図が二次元のものなので、当事者が二者の場合でしか適用できないのです（A1とA2、そして相矛盾するゴールのG1とG2）。現実の紛争はもっと複雑です。しかし、「勝利する」「撤退する」「妥協する」「超越（トランセンデンス）」などはどの場合にも大切な意味をもちます。オレンジの例では、実際にこれらの言葉がどういった意味をもつかを探すことに

なります。ある子どもは最終的にはオレンジに向かい、歩み、みんなでそれを二つに割り、種をまいたのです。

図2（28ページ）も同じように五つの結果に基づいていますが、その結果は、結果プロセスに関連づけられています。「～の傾向がある」という言葉には気をつけてください。関連はあるのですが、それは鉄則ではありません。

何人かの参加者は、判決（法のルール）が暴力（人のルール）と同カテゴリーに属している（26ページ参照）ことに驚きを感じるかもしれません。しかし、これらの論理は勝利者と敗北者という考え方の点において類似しているのです。あるいはまた、もっと基本的な線で「正しくあること」という考え方をともにもっています。「正当性」はほとんど物質的なこと、たとえば「正当な権利がある」というようなことになる可能性があります。そのために、たとえば夫婦間の紛争などで、もっと建設的な結果を生む道をじゃまする可能性もあります。

このマニュアルのアプローチの目的は、超越であり、その目的のために対話の必要性を確認することです。しかし、だからといって他の結果や他のアプローチを完全に否定するものではありません。たとえば、極端なケースとして、他の方法（メソッド）が試されたあと、その状況が本当にもうこれ以上続けることのできない状態であれば、最小限の暴力の使用に踏み切るということも含めています。

超越は状況を再定義することを意味します。つまり、相容れない、行き止まり、と見えていたことでも、新しい景色（最後にあるらくだの話を見てください）が広がる可能性を創るといことなのです。創造性こそが鍵です。紛争は転換（トランスフォーム）されてきているのです。では、次に創造性について説明します。

# 創造性、超越、そして紛争の転換

## 1 創造性のための公式はあるのでしょうか？

公式というものは、多分ないでしょう。発見的学習方法、いわば公式のための公式といったようなものならあるのかもしれませんが。その貴重な現象（創造性を育てる）をしっかりと育むためには役に立つものです。しかし、まず創造性に関してよく耳にするコメントなどについて考えてみましょう。

「なんだ、簡単なことじゃないか！ なぜこのことをもっと早く思いつかなかったんだろう！」

「今までいってきたことや、やってきたことが、ほんとにちっぽけなことに思えてしまうよ。まるで地面から目を上げて現実を直視していなかったようだ」

「まるで目の前に新しい現実が開けたようだ」

「この新しいアイデアに光を当てると、いままでのことが、いままでやってきたことが、あたかもこの広大な開けた空間のなかの片隅にある特殊なケースのように感じる」

「神は、ニュートンあれ、と言われた。すると光があった」(アレクザンダー・ポープ、1688～1744年、英国詩人)

「なんて恐ろしいことなんだ。私たちは本当にこのように大胆な目新しさについていけるのだろうか？」

まるで古くて習慣的なものが特殊なケースとして存在し（かつての自分たちの立場）、しかし、今や新しい光に照らされて新しい展望のうちにある、とされているようです。そうでなければ、「クリエイティブ」ではなく、「クレージー」です。コロンブスが卵の一部をつぶしてまっすぐに立

てたときでさえ、もともとバランスのとれない卵そのものはそこに同じように存在していたのです。「そんなに単純なことであったならだれだってやってのけることができたのだ」というような発想に対する彼の返答は、よく引用されるように、「やってのけたのは、私ですよ」だったのです。

この話でも、古いものは新しいもののなかに隠されています。卵のつぶされたところは、ぎりぎりバランスがとれる限界まで小さくできるでしょう。その時点で明らかになるのは、古いものは問題そのものを包括できないということです。それはまさしく、ユークリッド幾何学がアインシュタインの問題を包括できないのと同じです。彼は、四次元のリーマン幾何学とロバチェフスキー幾何学（ユークリッド幾何学はその特殊ケース）を探求する必要があったのです。古いものと新しい考え方や行動の間での継続性は、ある程度有効なのです。

まあ、そういったところでは、結論に移りたいと思います。仮説として、「創造性の公式」を提案しましょう。

考え方、発言、そして行動における創造性の基礎は？

A 現象がブロックされていて閉鎖状態にあるということを明確にする。

B その現象の文脈のなかで明確にすること。

■ 定数とみなされ、かつて考慮の対象にされなかった要因を見出すこと。

■ その要因を変化させ、心のなかで実験してみること。

■ 仮説——それが、現象のブロック状態を解き、閉鎖状態を開いていくものであること。

C この仮説を現実社会で試してみること。

いいかえると、創造性は科学的なプロセスに関連しているということです。ほとんど驚くに値しませんが、科学的プロセスが創造性と関係があり、創造性がパラダイムの変化と関係があるからこそ、ちょうど私たちが考察

したこの公式のなかに簡単にぴったりと当てはまるのです。この与えられたパラダイムのなかでの仕事もまた、科学と同一のもので。しかし、「突破」としてではなく、パズル（トーマス・クーン）としてそうであるのです。この言い方はまた交渉の場で用いられます。まるでねずみの安堵感を模写しているかのようです。つまり、出口を探して迷路のなかで苦労しているねずみが、突然、出口（小さな解決法）を見つけること、あるいは、その迷路には天井（覆い）がなかったんだ（大きな解決法）と発見し、そこからジャンプして飛び出すという場合などです。

この経験は、社会学者が多変量の解析のなかに「第三の」変数を持ち込むときに発見することに似ています。XとYの間になんの関係性も見あたらないように思っていたものでも、Zが導入されることによってまったく違ったものになるのです。Zの値が低いとき、XとYの関係は肯定的になり、Zが高いときには否定的になるのです。ゼロの関係性はいまだあって、平均値のなんらかのかたちとしてもっと複雑な現実のなかに隠れています。創造的な行為は、バランスをとる前の卵の一部をつぶすように、以前の図のなかに描かれていない第三の（第四の、第五の）変数を明確にすることなのです。洞察による報酬は偉大なものです。これまでつまらないと思われていたデータが新しい調子で歌を奏ではじめるのです。

日本から二つのまったく異なる例をあげましょう。両方とも音楽に関するものです。まず最初のケースは「カラオケ」です。舞台があって、ホールには人びとが集い、聴衆になります。マイクとアンプがステージに用意されていて、伝統的には、歌手がステージに、聴衆がホールにいるわけです。カラオケはホールとステージの間で、人びとを順ぐりに交代させ、全員が歌手になったり聴衆になったりするのです。プロの歌手のように、アマチュアたちが歌いたいプログラムを選びます。

すると、プロのように歌詞を暗記しているわけではないので、プロンプター（歌詞の字幕）が適確な速度で音楽とともに流されます。歌手が聞

き手になり、聞き手が歌手になります。空間的に入れ替わるわけではないのですが、ホールとステージのなかを往き来しているのです。

もう一つは、もっと最近の例ですが、ダンサーたちが、体のさまざまな部分、特に脚や腕に、センサーをとりつけるという試みがあります。ダンサーたちが動くにつれて、音楽が創られ、いろいろな音色やリズムが生まれます。その特別なやりかたで踊ると、その音楽はもっと魅惑的になり、特別な音楽が魅惑的なダンスを引き出すかのようなようです。速い動きと適当な腕や脚の動き、足や手の揺り動かし、お腹の動きとともに、複雑な音楽が創られるのです。可能性は多数あります。音楽とダンスとの間の時間の順はひっくり返っています。音楽がダンスを操り、ダンサーがそれに従うというよりむしろ、今やダンスが音楽を操り、音楽がそれに従うのです。動きが音楽に置き換えられます。それはなにも新しいことではありません。しかし今回は体全身の動きであり、ただ、指や肺、唇、舌などの動きではないのです。この創造的な行為のためには、進化した電子技術こそは、たぶん十分な条件ではないにしろ、必需品だといえるでしょう。

日本の話が出たついでにもう一つ。日本人が時間とコンピューターを「ウォッチ（腕時計）」（なにかをウォッチ〈見る〉するもの、という意味で）のなかに一緒にしてしまった、と告げられたとき、スイスの時計メーカーの反応は「時計は時計、コンピューターはコンピューターだ」でした。このことは、「その二つは決してお互いに関係のないものである」という考え方を表していました。この二つの異なる機能の物理的な違いは、まったく日本の製造者たちが挑戦したことであって、それはうまく成功したのです。

ですから、創造的な行動というのは決して真新しい要素を導入しなくてはいけないというものではありません。ただ、空間と時間のなかで、新しい方法で一緒にさせていくということなのです。あたりまえだと思われて

いた空間のアレンジと時間の順こそが、変革されていくべきなのです。その理由から、正しいとされる空間の順が定まっている文化においては、創造的（クリエイティブ）になるのは特に簡単です。というのも、挑戦すべきものがたくさんあるからです。次のような文化は創造性を呼び込みます。それは、世界をはっきりと中心部と周辺部に分けたり、因果関係を、中心部から周辺部へ向かっていくと認識し、（たとえば、舞台からホールへ、というように）その反対の向きではないと考え、時の流れを、過去にあったこと、これからあること、のように明確な見解で直線的な概念で受け止めている（たとえば、音楽と体の動きのように）ような文化のことです。しかし、西洋の文化のように、そのような直線的な概念が固く定着していると、大変な抵抗にあうということも覚悟しておかなければなりません。

ですから、もし、原因＝中心部＝神、そして結果＝周辺部＝【自然＋人間】、ということであるなら、神の姿に似せて創られた後者、そして民主主義、非宗教主義、進化論といった考え方は、革命的であるとなるでしょう。第一の民主主義は、民衆・周辺部に力が授けられたというもので、それはまるで首都のない国に似ています。第二の非宗教主義は神を周辺部としてあつかい、神こそが人間によって人間の形に似せられて創られたということを提案しています。第三の進化論は、人間は自然界の競争によって出現したもので、アダム・スミスがいうように、このプロセスからそれぞれの世界のすぐれたものが出てきた、というものです。

## 2 創造性から超越へ

「超越（トランセンデンス）」という言葉は、新しいタイプの現実（リアリティ）を創り出すということを意味します。それは、潜在的にそこにあったものが経験的な現実になっていくということです。紛争の理論や実践の例として、共同管理のアイデア、つまりある一定の領域を、それが紛争地帯であるなしにかかわらず、二つまたはそれ以上の国が共同で所有

するというものがあります。そこでは、アンドラの古いやり方が思い起こされます。また、南極大陸、スピッツベルゲン（島群）やオーランド（諸島）の様相、ニューヘブリディーズ（島群）の古い協定、カメルーンなどの例があります。争われている領域をめぐる二国間の紛争は、軍によって、または裁判における闘いによって、片一方が勝利するというかたちで終結するかもしれません。または、その領域を分断するという妥協案に終わるかもしれませんし、両方とも自らの言い分を撤回し、領域をほかの誰か（たとえばその住人たち）に託すということになるかもしれませんし、さらにまた、その領域を二国で一緒に所有するということになる可能性もあるのです。明らかに、最後の共同所有という終結方法のみが経験的な現実を超越しているといえます。それに対し、他の方法は個々の土地が一つの国家のみによって所有されるという公式に従っているのです。

もう一つの例を出しましょう。ヨーロッパ諸国は、宗教家たち、貴族たち、そして中産階級の市民たちによって治められていました。すなわち、ことばによって、剣によって、そして金によって治められていたのです。王や皇帝は貴族でした。しかし、その王座は剥奪され、次を継承したシステムであるデモクラシーとは、ことばと簿記を一緒にして、貴族の身体的な決闘をことばの決闘（選挙運動）に置き換え、政党に入る票を数えるということをするものでした。時が経つにつれて、選挙権がある人びとの幅はかなり広がりました。潜在的な政治の現実が経験的な現実になったのであり、いまだに古いものを超越（トランセンド）しているということなのです。それは非常に創造的であり、少なくともその時代においてはそうでした。しかし、古いものはいまだそこにあり、支配するものと支配されるものは依然としてはっきり分かれていたのです。そして剣もまたそこに存在し、軍隊、警察、そしてそれらに挑戦していく者たちの手中にあるのです。

### 3 超越から転換へ

超越とは、新しい現実をとり入れ、新しい景色を展開するものです。紛争を転換するという事は、そういった新しい現実に紛争を移植することです。紛争を転換することとは、紛争当事者の目標（ゴール）というものを超越させるということです。そして他の目標を定義します。当事者たちが紛争のために用意したベッド（温床）から紛争そのものを取り出します。対立が克服できない、すなわち超越不可能な矛盾であるという言説も含めてです。紛争をもっと前途有望なところへ移し変えるのです。このことをうまく実行に移せるようにするには、紛争そのものが、当事者があまり考えつかない他の当事者や目標をつけ加えることによって、転換されねばなりません。言い換えると、もしある種のパーティ（例えば「過激派」）を無視するのは大きなまちがいです。というのは、彼ら、彼女らは必ず何かの行動を起こして言い分を表明するだろうからです（イスラエル・パレスチナにおける和平推進）。穏健主義者たち（中道派の人びと）を除外して紛争を単純化するのもまた大きなまちがいです（北アイルランドの和平推進）。実りある転換への道は、複雑なものです。ですから、いくつかの当事者（国）や目標をグループ分けする必要があります。そして紛争の歪曲や変形を常に防ぐよう努力します。

ペルー人質事件の場合、紛争を、（法違反の、暴力的な）所有地侵害と人質捕縛の問題としての要素よりも、ペルーの貧困を減少させる問題として考えることを私は提案しました。それは、紛争の定義を超越することで、メタ・コンフリクトから根源の紛争へ変更することでした。紛争を転換するために、紛争自体は拡張されなければならなかったのです。そうして、解決法が転換された紛争のために提案され、当事者に仕事が分配されました。紛争をもともと定義されたように解決するのです。もしそうでなければ、転換ではなくて、歪曲となり、いずれもとの紛争がぶり返すのです。

もし私たちが、紛争とは破壊の源にもなり、また創造の源にもなりえる、ということを認識したならば、紛争の転換への一つのアプローチは創造的

側面が優位になるように行動することです。これは、その紛争を暴力から遠ざけるということ以上のことです。個人の行為者が関与している人間の発達、集団の行為者が関与している社会の発展、そして世界の発展、という発展の方向へ、その紛争を向かわせるのです。紛争に関係していく者はみな、よりよいユーゴスラビア、中東の平和と発展、そしてペルーの貧困の改善など、志の高いメタ・ゴール（上位ゴール）を掲げるべきです。

ここでとられている姿勢は、①紛争に現れる文化と構造、②行為者、そしてなによりも、③紛争そのものに対する深い理解なしには無意味なものであるということです。紛争の実践は紛争の理論に根ざすべきであり、紛争の理論は紛争の実践から展開されるべきです。関与していく人びとは、ただ単に共感的であるとか、非暴力的であるというだけでなく（これらのうちの一つだけでは役に立たないのです）、創造的にならねばなりません。私たちは、こういう人びとを紛争ワーカーと呼ぶことを提唱します。当事者の主たる道具は、紛争のなかにいる当事者たちの間の対話をとりもつだけでなく、彼ら、彼女らとの直接的な対話です。そうするために、紛争ワーカーには、一般的な紛争の理論と実践の基礎知識とともに、特に、共感、非暴力、そして創造性がもたらす力についての基礎知識が必要なのです。

紛争ワーカーには、暴力のいろいろなタイプについての知識も必要です。メタ・コンフリクトにあらわれる直接的暴力のみならず、構造的・文化的暴力、その紛争に隠れている悪い構造や文化、その紛争からつまみだされないといけない悪い「賭け」などについてです。残るは、かつてなかったような深い対話による、平和につながっていく、紛争の転換です。その結果は、非暴力的に、そして創造的にあつかわれることのできる転換された紛争となるのです。

朝鮮半島の例を見てみましょう。争いのたいへんなエネルギーが紛争につき込まれており、再び戦争が勃発してもおかしくない状態です。それは

半島の社会のなかの混乱（北だけではありません）や、東アジア、さらにより広い地域からの影響もあります。このエネルギーをもっと肯定的な課題に向けられないでしょうか？

それでは、アプローチの一つの例です。アジア太平洋のための国連経済社会理事会によって（鉄道に関して）提案されたように、北と南の間に鉄道と自動車道を通すということです。この境目（ボーダー）は、貧（ベトナム、中国、北朝鮮）と富（台湾、日本、韓国）の境目でもあり、いつかはEU各段階のように、東アジア共通市場、東アジア経済共同体、東アジア共同体、東アジア連合などとなるでしょう。生産物は両方へ流れ、富は築かれ、北朝鮮・韓国にとっての波及効果は大変なものとなるでしょう。必要なものは交通手段におけるちょっとした協力なのです。

分析すると、転換にはいくつかの側面があります。

■ 会話（言説）の変換、軍事や政治の構造ではなく、経済協力や共通の文化について語ること。

■ 韓国・北朝鮮のみならず、近隣の四カ国、東アジア（中、日、露、台）を巻き込んで、新しい上位ゴールを公式化すること。

■ 紛争を元のところからとり出して、経済協力の、致命的ではないが微妙な問題のなかに位置づけること。

■ 南北双方に求められるのは、基本的な変化や相互の愛や相互信頼ではありません。ただ、双方の利益の追求こそ求められているのです。

■ 「パレート最適」（他方の犠牲の下に一方の便益を最大化する状態）の考え方ではありません。だれにとっても損ではなく、六つの当事国にとって得をする話です。

■ プランは撤回できるとはいえ、当事国において、続行の動機を与えるような既得権益ができるでしょう。

■ その新しい設定で、その「賭け」において、他のすべての事柄が徐々に明確にされていくでしょう。あるいはそれらは消えてなくなってしまう

かもしれません。

紛争の転換のためのこれらのアイデアは、関与する当事者との対話から発展してきたものです。試してみる価値があるでしょう？

## 二つの話

# らくだ、数、その他のことについて

1 昔々あるところを、一人のイスラム教の賢人（ムッラー）が、らくだにのってメッカにむかっていました。

あるオアシスに近づいたとき、三人の男たちが立って泣いているのを見つけました。そこで、ムッラーはらくだを止めて尋ねました。「息子たちよ、どうしたのかね?」。そうすると、男たちは答えました。「私たちの父親がたった今、息をひきとったのです。あんなに大好きだった父親が……」。ムッラーはそれに対して言いました。「お父様も君たちを愛しておいでになったにちがいないよ。なにか君たちにお残しになったものがあるだろうか?」

三人の男たちは答えました。「はい、その通りです。らくだを何頭か残してくれました。遺言では、2分の1を長男に、3分の1を次男に、そして9分の1を末っ子に分配せよとあるのです。私たちはらくだが大好きで、その分け方にも賛成しています。でも一つだけ問題が残っているのです。父親は17頭のらくだを残してくれたのですが、私たちは学校で習ったのです。17は素数（割り切れない数）なので、らくだを大切にしているので、切り裂いて分けることはできません」。

ムッラーはしばらく考えて、こう言いました。「では、こうしよう。私のらくだをあげるから、18頭のらくだを分けあいなさい」。すると男たちはびっくりしていいました。「いいえ、とんでもない。そんなことはできません。あなたは、とても大切な用事のためにどこかへ行く途中でしよう……」。ムッラーはさえぎって言いました。「子どもたちよ、いいかららくだを受け取りなさい」。

というわけで、男たちは18頭を2で割り、長男は9頭のらくだを、また3で割り、次男は6頭のらくだを、また9で割り、末っ子は2頭のらく

だをもらいました。そして合計してみると $9 + 6 + 2 = 17$ 頭のらくだという計算になったのです。そこで、らくだが1頭残ったわけです。つまりそれは、ムッラーのらくだです。ムッラーは言いました。「これでいいかね？ これで、私のらくだをお返し願えるかな？」

三人の男たちは、何がなんだかわからぬまま、心から感謝して「もちろん、どうぞ」と言いました。ムッラーは男たちを祝福してから、らくだに乗りました。最後に男たちが見たものは、真っ赤な夕日のなかに消えていった小さな砂けむりでした。

2 昔々、一人の弁護士が豪華なマイカーで砂漠を走っていました。オアシスを通り過ぎようとしたちょうどそのとき、三人の男たちが立って泣いているのを見つけました。そこで、弁護士は車を止めて尋ねました。「どうしましたか？」。そうすると、男たちは答えました。「私たちの父親がたった今、息をひきとったのです。あんなに大好きだった父親が……」。[しかし]、と弁護士は言いました。「お父様は遺言を君たちに残されただろう？ 私にできることがあるかもしれない。もちろん手数料はかかるけれども」。

三人の男たちは答えました。「はい、その通りです。らくだを何頭か残してくれました。遺言では、2分の1を長男に、3分の1を次男に、そして6分の1を末っ子に分配せよとあるのです。私たちはらくだが好きで、その分け方にも賛成しています。でも一つだけ問題が残っているのです。父親は17頭のらくだを残してくれたのですが、私たちは学校で習ったのです。17は素数なのです。らくだを大切にしているので、切り裂いて分けることはできません」。

弁護士はしばらく考えて、こう言いました。「単純なことだ。私がらくだを5頭もらおう。そうすれば君たちに12頭のらくだが残るから、それらを分けあいなさい。2、3、6で割って、6、4、2頭のらくだをそれぞれもらいなさい」。ということで、三人の男たちはそのアドバイスに従いました。弁護士はいやがるらくだをマイカーにくくりつけました。最後

に男たちが見たものは、夕闇に光る太陽をおおうようにして、もうもうと  
かかる大量の砂けむりでした。

これらは、紛争に対処する二つのやり方です。どちらを選択するかはあ  
なた自身です。

**【付録】**  
**紛争の転換**  
**——トレーニング・コースのための練習問題——**

(これは、ガルトゥング氏のすすめで、日本語版につけ加えたものです。実際のワークショップのときに参考として使ってください)

【1】あなたのお父さんは日系ハワイ人で、戦争中、強制収容所に入っていたという経験をもつとします。戦後、仲間たちと一緒に闘い、合衆国政府から賠償金を勝ち取りました。ある日、黒人のボーイ・フレンドとともに一緒に帰宅したあなたに対して、お父さんは、「彼と一緒にになりたいなら、おまえを勘当する!」と言いました。さて、どうしますか?

【2】あなたのお母さんが、彼女の歳にはとても若すぎる晴れ着を着ておめかししています。あなたにほめてもらおうとやって来て、「これ、どう?」と聞くお母さんに、あなたは正直に答えたい。でも、お母さんに対して思いやりのある言葉を返したい。さて、どうしますか?

【3】あなたは、非常に、精神的(宗教的)な憧れをもっています。黙想したり、精神的な修行を積んでみたい。しかし同時に、あなたには物欲もあり、ローラー・ブレード、ドライブ、魚釣り、読書、音楽鑑賞などもしたい。このように、二つのことに同時に興味があるとき、あなたなら、どうしますか?

【4】あなたは、他の仲間の労働者たちとともに、さらによい仕事の条件と高い報酬が欲しいと思っています。しかし会社は、そんなことはできない、そんなことをしたら会社が破産する、といいます。確かに会社の言うことが正しいとき、あなたなら、どうしますか?

【5】あなたは、小さな夏の別荘をお客さんたちのために建てました。あなたもてなす相手は研究者が多いので、部屋のなかに棚やコンピュータのための机などを備えました。しかしあなたの配偶者が言うように、ワードローブを作り忘れたために、服やドレスなどを収納することができなくなってしまいました。しかも、もうスペースが残っていません。あなたは、スーツケースに洋服を入れてベッドの下に置くことを提案するのですが、もちろん、了承してもらえません。机などを外に放り出すことはしたくないのですが、夫婦関係はますます緊張の度合いを増していきます。さて、どうしましょう？

【6】一民族だけで成り立っていて、その民族のほとんどの構成員がその国のなかに存在する状態を、民族国家 (nation state) といいます。

——民族が二つの国にまたがって暮らしている場合を想定してください。どうしますか？

——一つの国に、二つの民族が暮らしていて、その民族同士が歴史上ずっと悪い関係にある場合を想定してください。どうしますか？

——二つの国があって、二つの民族がいます。二つの民族は二つの国に混在しています。しかも歴史上の関係は悪いという場合、どうしますか？

【7】軍事的な、政治的な、経済的な、そして文化的な、さまざまな理由で、2050年までに10億以上の難民や故郷を追われた人びとが生まれるだろうという予測があります。DPT (診断—予後—治療) を試して、本質的な要素について考察してみてください。あなたならどうしますか？

さらに情報をお求めの方、またこのマニュアルの英語版1冊を入手したい方は、次にご連絡ください。

Mr. Jon Ebersole  
Crisis Environments Training Initiative  
International Peace and  
Security Training Cluster  
United Nations Staff College Project  
Palais des Nations, P.S.1039  
CH-1211 Geneva 10  
S witzerland  
Telephone: +41 22 788 6381  
Fax: +41 22 788 6389/7616  
E-mail: [ceti@dha.unicc.org](mailto:ceti@dha.unicc.org)

もし、英語版のコピーを多数お望みならば、次にご連絡ください。

Ms. Valeria Morra  
Multimedia Design and Production  
International Training Centre of the ILO  
CorsoUnità d'Italia 125  
10127 Turin, Italy  
Telephone: +39 11 6936 667  
Fax: +39 11 6936 352  
E-mail: [v.morra@itcilo.it](mailto:v.morra@itcilo.it)

※また、[www.transcend.org](http://www.transcend.org)から引き出すこともできます。

## 編集者解説

このブックレットは、ヨハン・ガルトゥング氏による紛争転換のトレーニングのために書かれたトレーニング参加者用のテキストの簡略版（ミニバージョン）です。ガルトゥング氏は平和学者として世界の平和の理論をリードしてきた人です。これに加えて、ガルトゥング氏は、コンサルタントや各国指導者の友人として、国際問題の紛争解決について助言・提案を行ってきました。ガルトゥング氏は、紛争当事者との対話・議論の自分の経験から、紛争解決ではなく、紛争転換という考え方を編み出しました。それは、双方の対立の妥協点を調整するのではなく、対立や矛盾から飛躍して新しい創造的な解決法を探し出すという方法なので、「超越法（Transcend Method）」という名前になっています。

超越法の理論によれば、紛争（対立・争い・もめごと・いさかい）には三つの要素があります。第一の要素は、紛争には当事者（パーティ）が二つ以上ある、ということです。そして、紛争の当事者はその紛争場面にいる当事者のみならず、その周囲にも利害関係をもった当事者があることが多いのです。東ティモールの、独立問題に関する例題でも、ガルトゥング氏は東ティモールの指導者やインドネシアの指導者との関係だけでなく、アメリカ・日本・オーストラリア・ポルトガルなどとの関係でとらえることを提案していました。第二の要素は、当事者の達成しようとしているゴールを、それぞれの当事者において明らかにすることです。このゴールのくいちがいやズレによって、次に述べる対立・矛盾が起こるのです。第三の要素は、当事者の目標に対立や矛盾があるということです。このような対立は、時として暴力による戦争に発展させします。暴力的方法による紛争解決でなく、非暴力的・平和的方法による紛争転換をめざすことが大切です。

この対立・矛盾をどのように考えたらよいのでしょうか。これまで、そのためにたくさんの「紛争解決法」が考えられてきました。ガルトゥング氏の超越法もその一つです。

従来の紛争解決理論には、この二者の対立をちょうど綱引きのように紅組と白組がお互いに有利なように引っ張り合う状態から妥協点を見出すという考え方がありました。ガルトゥング氏の考え方はそれとは違います。ガルトゥング氏は一方の目標を横軸の右の方にあらわし、もう一方のゴールを縦軸の上の方にあらわします。そして、その横軸と縦軸からなるグラフ表面の上に五つの解決法を図で示しています（28ページ参照）。まず、第一は横軸の右側、すなわち一方の目標だけ実現するやり方です。第二の方法は（第一の方法と同じく）縦軸の上の方の目標だけ実現するという方法です。これらはどちらも一方は満足ですが、もう一方には不満足な、さらには相手への憎しみが残る方法です。おすすめるはできません。第三のやり方は、対立を対立のまま放置したり、全く関係のない人の手にゆだねて二者の目標がどちらも実現できない場合です。これでは、二者とも不満が高まり問題解決になりません。第四の地点は二者の目標を斜めに結んだ、その中間点です。それは、両者の目標をそれぞれ半分ずつ実現するもので、妥協とか折衷とよべれます。対立を綱引きのように考える見方です。これも双方に不満が残り次の紛争の火種が残る場合があります。第五の点は、第一・第二・第三の点を含む長方形の右上の頂点です。第五の地点を、超越法による解決点とします。そこでは、二者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決法となっています。このような解決法を生み出すためには、紛争当事者間の解決ではなく、第三者の導入が必要です。この第三者として調停・仲介する人のことを、紛争ワーカー、または平和ワーカーとよびます。超越法による紛争解決は、まず対立する当事者と平和ワーカーとが対話をおこないます。それは、20分間の場合もありますし、もっと長い場合もあります。対話は、当事者と一対一で行われます。いきなり対立者同士を同じテーブルにつかせることはありません。対話では、その当事者がどのような目標をもっているかを聞き出します。相手の気持ちを理解し、

心をともしする、すなわち、「共感」することが大切です。しかし、「共感」は、自分も相手と同じ意見になり肩を持つこと、すなわち「同情」ではありません。

超越法では、とくに周りから非難されている「悪者」の側の目標や考えを聞き出すことに重点をおいています。たとえば、ユーゴ空爆の場合のセルビア人の考え方、東ティモール独立問題の場合のインドネシア指導者の恐れや考えを聞き出すことが大切だといいます。対話のなかでは、さきほど述べた五つの地点をいつも頭に浮かべることが大切です。対話をおこなうことにより、①受容可能で、②持続可能である、という二つの条件を見いだす解決法がないかどうかを探りあてていくのです。双方が納得する解決法を創出することにより、紛争・対立の敵対状態を転換・変形して、当事者が一致協力できるような新たな目標に向かうようにするのです。

紛争転換において、次に大切な図式は、A B Cの三角形です。A（態度）は、偏見や怒り・恐れ・憎しみなどの感情など当事者の心の内面をあらわします。B（行動）は、当事者の行いであり、衝突や脅しなど暴力的な行動と、そうでない行動があります。C（矛盾・対立）は、目標の不一致から生ずる衝突や対立です。目標がぶつかっている状態（C）が、ゆがんだ心のあり方（A）や暴力などの行動（B）の土台なのです。したがって、一見イデオロギーの対立が本質的に見えるような場合でも、その背後にある、つまり、紛争の土台にある目標の不一致による対立（C）という原点に立ち返って、紛争に対処する必要があります。紛争転換のための超越法で重視するのは、A（態度）における「共感」、B（行動）における「非暴力」、C（対立）における「創造性」の三つです。

ガルトゥング氏の紛争転換のための超越法のトレーニングは、第三者として紛争当事国と対話する紛争ワーカー・平和ワーカーとして活躍できる人材を養成するためのものです。事実、ガルトゥング氏は外交官や国連職員や国際NGOの人々など、実際に紛争を調停する役割を担う人々のトレーニングをおこなってきています。そのためにガルトゥング氏は「TRANSCEND」という国際NGOを設立し、そこで紛争転換の各種プログ

ラムを企画・立案・実践・訓練しているのです。「TRANSCEND」には、ホームページがあり（[www.transcend.org](http://www.transcend.org)）、主な文書はすべてここで公開されています。

しかし、平和ワーカーの知識と技能は、第三者の紛争を転換するためだけのものではありません。自分自身が紛争に巻き込まれたり、当事者になったりしたときにも役立つ方法なのです。人間は自分自身と対話することができる動物です。また、対立する相手方の目標を理解し、共感することも、訓練によって上達するでしょう。

「共感」「非暴力的方法」「創造性」という三つの能力を身につけるために、紛争転換トレーニングが有効です。ガルトゥング氏によるトレーニングが1999年秋に、日本で3回行われました。この3回のワークショップの参加者が中心となって「紛争転換（トランセンド）研究会」（仮称）が現在準備されています。「平和の文化国際年」である西暦2000年以降での日本での平和ワーカーの訓練をはじめ、実践・教育・研究などの諸活動の準備が進められています。くわしくは編集者または訳者にお問い合わせください。

1999年11月

伊藤 武彦

## 訳者あとがき

「平和」とは創り出すもの——この姿勢を「文化」のなかに定着させていくことこそ、今後の大きな課題であると考えます。学校教育のなかで、地域の触れあいのなかで、そして世代から世代へと文化を伝えていくなかで、「平和」は、ただ待つものではなく、創り出していくものであるという概念が人びとのなかに育っていくためには、「TRANSCEND」の重要なポイントである「創造」力を持つことを認め合い励まし合うことで、多様性を楽しみ、寛容な社会を創り出せるのだと信じます。

また、「想像」力を培うことで、相手の立場に立って共感することができるようになります。さらに「対話」を通してゆっくりとお互いのなかにある肯定的な要素を見つけだし、問題を共有するところまで到達できれば、よりよい文化・社会を創ることができるでしょう。日常レベルの紛争から国際レベルの紛争まで、この「創造」と「想像」を大切に育てていくことで、解決・和解につなげていくことになるのです。

このマニュアルが、すべてのプロセスのなかで非暴力を根拠とするような文化、すなわち、ライフ・スタイルそのものが非暴力に根ざした社会構造の創造に活用されるよう期待しています。また、一人一人の限りない可能性が摘み取られたり、抑圧されたりする文化ではなく、その可能性が期待され、歓迎される文化を創り出すための一歩として役立つことを願っています。

翻訳については、不十分な点もあろうかと思えます。ご助言をお待ちしております。

奥本 京子

【著者】

Johan Galtung (ヨハン・ガルトゥング)

1930年ノルウェー生まれ。オスロ大学大学院修了(博士・数学)。平和学者として世界の多くの大学で教育にたずさわるかたわら、紛争転換のNGOであるTRANSCEND(www.transcend.org)の代表を務める。80冊、1000論文を越える平和学関係の著作がある。

【編集者】

伊藤武彦 (ITO,Takehiko)

1955年三重県生まれ。東北大学大学院修了(教育学博士)。和光大学人間発達学科教授。専門は心理学。研究課題は平和意識・平和教育の研究。日本科学者会議平和・軍縮教育研究委員会委員長。日本心理学会会員。心理科学研究会会員。日本平和学会会員。

〒215-0027川崎市麻生区岡上1620-302

電話 & F A X 044-987-2511 E-Mail: itot@wako.ac.jp

【訳者】

奥本京子 (OKUMOTO, Kyoko)

1970年大阪府生まれ。神戸女学院大学大学院博士課程修了。大阪女学院短期大学専任講師。専門は英文学と平和学。シェイクスピア研究、平和と文学・芸術を研究課題とする。日本シェイクスピア協会会員。日本英文学会会員。日本平和学会会員。日本科学者会議平和・軍縮教育研究委員。

連絡先: 〒540-0004大阪府中央区玉造2-26-54

電話 06-6761-9371, FAX 06-6761-9373

【「紛争転換(トランセンド)研究会」(仮称)連絡先】

〒215-0027川崎市麻生区岡上1620-302 伊藤方

電話 & F A X 044-987-2511 E-Mail: itot@wako.ac.jp

平和的手段による紛争の転換——超越法——

2000年2月1日 第1版第1刷発行

定価は表紙に表示

2004年11月25日 第1版第2刷発行

著者 ヨハン・ガルトゥング

編集者 伊藤武彦

訳者 奥本京子

発行者 斎藤登志喜

発行所 平和文化

〒113-0033 東京都文京区本郷2-23-3

TEL03-3812-8618 / FAX03-3812-7105

装丁 みらい

製作 (株)平河工業社